

本書は、評者の教え子・猪俣剛君と、さらに後発の宮澤淳滋・長堀加奈子さんが訳し、故・河合隼雄教授の子息・河合俊雄君（彼も、何と、今や京都大学を定年退官して名誉教授なのだ）が監修し、「まえがき」を書いている。そうした形式的な御託はこれですが、猪俣君が「解説」で書いているように、「ユングの口吻がそのまま伝わる」しかも、「ユング自身によるユング心理学」の解説なのであり、それはこれ以上ないと言ってよい「素人にも分かりやすい講義内容」なのだ。しかし、歴史的に言って、このような大切な意義を持つため、実に詳細な講義録や註やら文献やらが徹底的に添付されているため、一見すると、とても素人向きの解説とは見えないしろものになってしまっているのである。講義録そのものも、現地でのスイス・ドイツ語によるものは、講義に直接参加していたエドアルト・シェドラーと、リプカ・シェルフによるものを基としているが、彼らはあまりに忠実に筆記することに徹して、かえって時々中断せざるを得ず、また、誤記もしたりしているため、バーバラ・ハナとエリザベス・ウェルシュによる英語版謄写版ノートから、ファルツェーダーによって補填してある。つまり、現在得られる最高度に忠実な「ユング自身の講演録」なのだ。

このETHの大講堂には、評者も、あれはグライ・ラマの講演だったが、臨席したことがあり、一階は超満員、二階のバルコニーも人があふれていた。ユングのこの講義も、学生のみならず、一般参加も認められていたので、常時、400人から600人の聴衆が押し掛けた、ということである。

原書：Carl Gustav Jung, Ernst Falzeder (Ed) : Consciousness and the Unconscious : Lectures delivered at ETH Zurich, Volume 2, 1934

ヒトは嗜癖する

共依存から性暴力まで

斎藤 学著

金剛出版, 四六判 360頁, 3,960円, 2024年7月刊

(埼玉県立精神医療センター) 合川勇三

著者は日本の依存症臨床において大きな役割を果たしてきた。特に1996年に出版された『アダルト・チルドレンと家族一心のなかの子どもを癒す』（学陽書房）はアダルトチルドレンブームを引き起こした。30年近く前になるが、本屋に平積みされていたことを思い出す本である。

さて、本書は著者が行ってきた臨床活動に関わる観察、資料、分析、考察などを1冊の本にまとめたもので、主に『アディクションと家族』『子どもの虐待とネグレクト』誌に掲載された論文を改変・改正したものである。

第1章の「『共依存』再考」では共依存という概念が成立した歴史について述べた後、共依存と精神分析との関連について述べられているが、精神分析の基礎的な知識がなければ難解な部分がある。また認知行動療法については、現在の依存症治療では一般的に行われている治療法だが、著者は「CBTは薬物投与との関連を前提にしており、その効果が実は医師（治療者）・患者間の転移関係にあるかもしれないことをあえて無視して成立している」と批判的である。

第2章以降では家族問題を中心にして、児童期の性的虐待や近親姦を含む虐待、PTSD、解離性同一性障害、摂食障害について述べられている。提示されている症例は、非常に興味深いものが多い。特に児童期に虐待を受け、解離性同一性障害を来している症例などは、治療が困難であり、自分の診察室には登場してほしくないような患者が多い。第9章「男性のセクシュアリティと攻撃性」では殺人事件を起こした犯人の著者の精神鑑定について書かれている。すさまじい生育歴であるが、「児童期の非虐待体験の逆再上演として噴出した結果」犯行時の攻撃性が生まれたと著者は述べている。虐待の影響がこれほどまでに大きいのかと驚かざるを得なかった。

第10章ではAAの歴史や症例が提示されているが、最後に「嗜癖治療におけるパラドクスの処方」として、著者の治療論が述べられている。「嗜癖は……治療の初期に『治療不能』を宣告することが必要な珍しい病気である」「この『治療不能の宣告』と『どんな底体験』は『断酒（嗜癖の中断）の維持の物語』という恰好の対象を見出すきっかけとなるのである」等は以前常識として考えられていた。最近は「治療不能の宣言」や「底付き体験」に否定的な意見もあるため賛否両論あるだろう。また「治療者無力の処方……の徹底（治療者の絶望）だけが嗜癖者を回復させる唯一の道であることがあり得るという事実の持つ逆説性は、嗜癖というものの本質を露呈しているように思われる」というのはまさにその通りである。特にこれを困難にしているのは「治療者ナルシシズムという困った病気であるということだ」と著者は述べているが、嗜癖の臨床医は自分の自己愛を満足させるために、治療を行ってはならないということ忘れてはならない。あくまで治療者はせいぜい患者の伴走者程度でしかないことを覚えておくべきであろう。

ガスライティングという支配

関係性におけるトラウマとその回復

アメリア・ケリー 著
野坂祐子 訳

日本評論社、四六判 272頁、2,420円、2024年7月刊

（帝京大学心理臨床センター・NPO法人女性心理臨床ラボ）

笠井さつき

ガスライティングという言葉をご存じだろうか。1944年イングリッド・バーグマン主演MGMフィルムの名画『Gaslight（ガス燈）』で、美しい主人公が夫に心理的支配を受ける物語に関連するこの言葉は、「心理的な手段によって、相手に『わたしは正気なのか』と自分自身を疑わせるように仕向けること」と定義された、ガスライター（加害者。映画では主人公の夫）のパワーへの欲望により生じる関係性トラウマを表す。とくに親密空間の中で（主に）女性が自分の判断力に自信を失う過程で、ガスライ

ターの用いる心理的手段としては、「そんなことは、まったくやっていない」という否認や論点のすり替えなど、あくまで物理的暴力を伴わない心理的な追い詰めである。本書はその最初のページに『「わたしには、何の価値もない」と思っている女性たちへ』と記されている通り、こうした手段によりガスライターに支配された（主に）女性たちが、その関係性において自分に起きていることを正しく理解し、境界線をとりもどし、自尊心とセルフラブを高めるための、知恵と勇気の詰まったエンパワメントの一冊である。

著者のアメリア・ケリーは、私設カウンセリングオフィスでメンタルヘルスに関わるセラピストとしての女性支援の豊かな経験を背景として、その語りには大変説得力がある。また訳者はトラウマ・インフォームド・ケアの第一人者でパワーとコントロールという力関係の勾配に洞察の深い野坂祐子氏であり、トラウマケアの手引としての本書の価値も高い。

ガスライティングは、カサンドラ症候群、共依存、ヤングケアラーなど、関係性の困難を対象化したキーワードと重なる部分もあるが、より意図的で悪意がある点で、加害・被害の関係が明確である。前述の映画も、最後は主人公を救う別の魅力的な男性が登場することで、ガスライターである夫の悪事が暴かれるという勧善懲悪的な展開となっている。しかし、著者も述べるように、ガスライターになるのにも理由や背景があり、その被害者となるのも同様である。そして現実には当然ながら勧善懲悪ではなく、加害者支援の視点も必要である。いずれにしても、心理的・物理的暴力という行為そのものに関しては、その背景にどのような事情があってもけっして許されるものではない、という視点をゆるがさないことはこの議論において大切である。

評者が日々の臨床で出会う女性たちの、「私さえ我慢すれば」「生活力も経済力もないので」「子どもがいるから」という苦しい声からは、パートナーとの関係を一方で対象化しつつも、単純に加害と被害の関係に2分割しがたく絡み合う複雑な感情が見えてくる。そこに、本書の「境界線をつくる」「強固な結びつきから解放されるための手続きとしてのゆるし」などのワークが変化を生むだろうか。一人の女性の心が自由になることで、負の世代間連鎖は断ち切られるだろうか。それが可能な社会でありたいと、心から願う。